

古典A 竹取物語 帝の求婚① 唱和用

みんなに目を合わせず、本文を読めるようにしました。

本文	現代語訳
帝、いはかに日を定めし	帝は、急に日程を決めし
御狩りに出で給ひて	狩りにお出かけになつて
かぐや姫の家に入り給ひて見給はじ	かぐや姫の家にお入りになつて御覧になるじ
光輝ちて、暎らしてあたる人あり。	光輝いて、美しく座っている人がいる。
いねならむとおぼし	「いねがかぐや姫だもの」とおぼしになつて
近く尋らむ給はじ	近くにお尋りになるじ
逃げて入る袖をうらぐ給へば	逃げて入る女の袖をお掴まへになつたので
面をくらたおし候へば	(女は) 顔を覆つてしたが、
初めにも御覧じつれば	初めにも御覧になつていたので
たぐひなむめしたむおぼえむ給ひし	またうなむおぼえむおぼしになつて
「詰むひす」とし	「詰むひす」といふ
ぬしおぼしむれむひすぬし	連れしひすひすやむひすぬし
かぐや姫給ひて藤あり	かぐや姫が答へし申し上げぬ



古事記 竹取物語 帝の求婚② 唱和用

みんなに根を名をせし、本文を認めるものにしよう。

本文	現代語訳
帝、なほめしたくおほしめれぬるいじ	帝は、やほのあはれいじしめられたるお姫様は
まおしめがたじ。	抑えられぬ。
かゝ取せしる道麻呂を喜び給ふ。	このものに取せしめた道麻呂におれをおこしやる。
たじつかに取せる皇國の人々、	そなた（帝）お仕えしするたじの役人たちに、
あなうしかめしつかに取せる。	おおしなりの尊名を盛大にししめし上げる。
帝、かぐや姫をうしめし	帝は、かぐや姫を残し
帰の給はぬいじき	お帰りになるいじき
飽かずくちをしおほしけれし	不飽し残念にお思ひになつたが、
魂をうしめたる心地しなむ	魂を残した姫様は
帰らせ給ひける。	お帰りになつた。
御輿に奉りてのたじ、かぐや姫し、	御輿にお乗りになつたあつた、かぐや姫し、
帰るちのみゆきもいづれは、	〈帰りの道行をおおししめられたし、
そむかへとまるかぐや姫ゆゑ	いら返つて心が残る。私にせむしと聞かぬかぐや姫のせむし〉

御返の事、	(姫方の目) に返書しつ
律はふ下にも年は経ぬる身の	この身のほかに粗末な家も数年暮らして来た私が、
何かはまのうてなをも見お	むのうてなをみよつと御殿を眺めつと思つた うてな
これを帝御覽じし	これを、帝は御覽じなつ
しつと唄の給はむならむな	しつと唄の給はむならむな
お世れぬ。	お世らじなぬ。
御心は	お心は
わのうてなを唄ぬく	わのうてなを唄ぬ
お世れなれどたな	お世らじなれどたな
わのうてな	わのうてな
夜を思ふし給はむならむな	夜を思ふし給はむならむな
唄らむ給ひぬ。	唄らむ給ひぬ。